

江那友樹、十七歳、クラスメイトを殺した。

死んでもまったく悲しくないやつだったが、自分の手で殺すことになるとは思わなかった。額や鼻の頭に汗が噴き出る。なんて未来だ。すごい世の中だ。もうなんでもありだ。

ホームルームが終わって担任が出ていくと、糸がほどこけるように教室の空気がゆるむ。帰宅組はマックだカラオケだと放課後の予定を話し、隣の席の長田くんはウホッホーとバナナをもぎりに行くゴリラさながらの雄叫びを上げて教室を走り出ていく。長田くんは野球部のキャプテンで、甲子園出場に高校生活のすべてを捧げている。

青春の輝きを撒き散らすクラスメイトを横目で見送り、帰宅組のぼくはいそいそと教科書を鞆にしまっている。ぼくと運動部は縁がない。昔から運動全般が苦手だった。いや、小学校低学年くらいまではそうでもなかった。走りもまあまあ速かったのに、そのあたりから体重が増えはじめ、同時に運動も苦手になっていったのだ。

痩せたら運動神経も復活するだろうか。ぽっちゃりが

ほっそりになるだけでも、ぼくの日々は三割マシになるはずだ。仮想の明るい未来を想像しながら帰ろうとしたとき、

「江那ちゃん、待って待って。掃除代わってー」

背後から、井上がべったりと肩にもたれかかってきた。へらへら笑いながら、なあ頼むよと脇腹を拳で抉ってくる。痛い痛い痛い。

「終わったら連絡して」

返事を待たずに井上は友人と連れ立って帰っていき、ぼくはうつむきがちに息を吐いた。肩にかけた鞆を机に戻し、教室の隅のロッカーから掃除用具を取り出す。

真面目に掃除をしているのはぼくを含めて三人、だるそうにだが一応やっているのが五人、完全にサボっているのが二人。その比率をいつも不思議に思う。

掃除当番は一クラスを男女混合四つに分けて回していく。適当に分けられたグループのはずなのに、しばらく経つとごく自然に、よくがんばる生徒、普通にこなす生徒、全力でサボる生徒という上・中・下の階層に分断されていくのだ。ちなみにサボる生徒が（上）である。

奇妙なことに、どれだけ適当に分けられても、ぼくは

いつの間にか下の階層に組み込まれている。ぽっちゃり体型で、勉強と運動は中の下、もしくは下の上。ひとつひとつは致命的ではないはずが、複数が合わさり『江那友樹』になった途端、なんらかの法則が発動し、異世界に飛ばされるライトノベルの主人公みたいに、ぼくは下の階層へ飛ばされる。けれど飛ばされた先でも勇者や魔法使いになったりしない。ぼくは、どこまでもぼくだ。もがこうがあがこうが、神の摂理のように、ぼくは下の階層から抜け出せない。さらに恐ろしいのは、おそらくこの法則は社会に出ても継続されるだろうこと。

——ぼくは一生、搾取される羊として生きていくんだろうな。

乳を絞られ、じっとおとなしく毛刈りをされ続けるだけの弱い生き物。けれど、と思う。ある日ふと、稲妻のような強く輝かしい天啓がぼくを貫いたりしないだろうか。

——ぼくはもしか、羊の皮をかぶった別の獣なのでは？

——このもこもこしたダサイウールを脱いで、変身する 때가くるのでは？

そのときがくれば、ぼくを幼く見せる八重歯は鋭い牙となり、短く切りそろえられた爪は凶暴な鉤形に曲がり、世界をうっすらと包む不条理という名のベールを引き裂くのではないか。唸りながら荒野を駆け抜ける、獣となったぼくを想像してみる。

箒を使うたび、埃がきらきらと舞い上がる。窓から差し込む西日に浮かび上がる埃にまみれながら、激しく輝かしく燃える獣の冒険譚を繰っているうちに掃除は終わった。現実から切り離された物語に没頭することで屈辱から逃れるのが、ぼくのいつものやり方だ。